

狭衣物語後半の方法

——宰相中将妹君導入をめぐって——

鈴木 泰 恵

『狭衣物語』は晩春の情景に、兄妹として育った源氏宮（実際には従兄妹）への、兄妹を脱した恋心を抱く狭衣を、重ね合わせて描出し、物語を開く。その思慕は一応、物語終盤まで持続するが、

源氏宮思慕を中心に物語が展開するのは、源氏宮齋院卜定、粉河詣まで、すなわちほぼ巻二に相当する部分までと言える。粉河詣は、源氏宮齋院卜定により、恋の実現を閉ざされた狭衣が出家を試みる場であり、源氏宮思慕の一応の結着点の意味をもつ。が、

さらに粉河詣の重要な意味は巻三の展開を方向づけることである。つまり、粉河において、巻一以降行方知れずになっていた飛鳥井女君（以下飛鳥井）とその娘姫君の存在が知らされる。その興味から、巻三に入って狭衣と、娘姫君を養女として一応宮との結婚がもたらされる。氣に染まない一品宮との結婚により、狭衣不如意の物語を語りつつ、それと対比的に女二宮思慕が浮上する。それが機能的には源氏宮思慕を肩替わりして展開するのが、ほぼ巻三の姿かと思う。しかし、一応の結着点として置かれた粉河詣において、狭衣出家という結着は、飛鳥井母子への興味ゆえ

に回避されてしまっている⁽¹⁾ので、源氏宮思慕は保留棚上げの格好のまま、巻二は女二宮思慕が大きな位置を占めてくる。

そうした状況の中で宰相中将妹君（以下宰相妹）は物語の中に新たに据えられるのである。宰相妹は一般には「形代」として一括され処理されてきた⁽²⁾と思う。しかし、宰相妹は導入時、すなわち「形代」と定位される以前には、別の意味を担っていたと思われる。

そこで、宰相妹を「形代」という方向からのみ処理するのではなく、もう少し詳しくみていきたいと思います。つまり、導入時においては、保留のまま退けられていた源氏宮思慕による物語を、もう一度何らかの形で物語中に回復しようとする方向性をもつ存在なのではないか。また、巻四に入って「形代」と据え直される時、「形代」であるゆえに、源氏宮思慕、あるいはその物語の姿を照らす鏡となるのではないか。そのような方向から、本稿では宰相妹の分析を通して、後半の源氏宮思慕の物語、さらには「恋の物語」のあり方と行方を、その意味するところを、明らかにしたいと思う。

(一)

宰妹が物語に持ち込まれる前の状況をしばらく追ってみたい。卷三後半、久々に狭衣は斎院を訪れる。その後、飛鳥井の法要場面をはさみ、斎院の本院移居という事態の中で、源氏宮思慕がクローズアップされる。

① 見るたびに心惑はすかざしかな名をだに今はかけじと思ふに

とて、御衣の裾を少し引き動かし給へれば、思しもかけず、見返らせ給ふ御顔の、限なき所にては「いとど、千歳を経て守るとも、飽くべうもあらじ」と、おぼへ給ふ。物見るとて、人々、端つ方にある程なるべし。け近きも恐ろしければ、立ち給ふも、飽かず佗しきに、「(略)かくては、あり果つまじう」ぞ、おぼし立たれぬる。

(三〇八頁)

(引用本文は岩波古典文学大系による。適宜表記を改め、傍線を施してある)

これは加茂祭の日の場面であるが、「見るたびに……」と、猶惑う心を示すものの「け近きも恐ろしければ」と、その場を離れ、源氏宮との恋をやはり閉ざされたものとするかのように、出家への心情に流れる。これは卷二の後半に置かれる斎院卜定、初斎院への移居の折のものと同様であろう。以下その場面を示す。

② 「今は『かくだに聞こえさせじ』と、念じ侍れど、物思ふ魂あくがるとは、まことにこそは。(略)いでや今は、とてもかくても、同じ様にて侍るべきにもあらねば、^①『見えぬ山

路も、もろともにや』とさへこそ、思ひ侍りぬれ」とさへのかたまふ。(略)夜さりの御物参らせに、人々、近く参り寄れば、さすがに、つれなう立ち退き給ふ。(一九八頁)

① のように「あなたを連れ出してしまおうか」と、惑う心を訴えながら、人々が近く参上してくるので、その場を離れる。この後、源氏宮への思いは行き場を失い、出家を目指して粉河詣へとつながる。このように行きづまった源氏宮思慕が、卷三において再び物語表面に据えられるのである。さらにその前の飛鳥井の法要の場面は、卷一において源氏宮思慕を「あるまじき事」と自ら閉ざした時、飛鳥井が常にその現実的側面を引きうけて、狭衣を慰めていたことを思えば、飛鳥井物語の後日譚であると同時に、なによりも飛鳥井の成仏を語ることににより、二人は生死を隔て、二度と向かい合えないことを明らかにしていると考えられる。すなわち、狭衣はもう決して飛鳥井により慰められることはない、というところを語っていると思われる。

このように、猶続く源氏宮への思い、それを現実的側面において引きうけ慰める女君の不在を描き、さらに、解決しようと思えば、出家という形でしかない、切り開きようのない状況での思慕が再び引き出されたことが明らかにになると思う。

(二)

このような前提の上に宰妹は物語に引き出される。その容姿、形態から源氏宮の形代として登場する以前、すなわち卷三において兄宰相中将から紹介され、卷四に入って狭衣が宰相中将邸を訪

問するまでの、姿を現わす以前の幸妹について検討したいと思う。

③「略」入道の宮は、院の、とりわき、かしづきたてまつり、思し召したりしを、いたづらになし聞こえたる。かやうの交らひにも、さはいふとも、いますこし、かひがひしき御思えなどはおはしなまし」と、思すにも、我ながら罪重き心地のみして、(略)「なほ、いかで、いま一度、心の中を知らせたてまつるばかり、みづから、聞こえ明らめて、本意遂げな」と、思すことより外なきを、「なげきのもと」を、かれ果てなんことの心細きに、又、なほ、「忍ぶ振摺」は、かこち聞えぬべう、思ひ出でられ給ふも、わりなし。

(参)あくがるる我魂もかへりなん思ふあたりに結びとどめばなど、手習ひにすぎ給ふ程に、宮の中将(注・宰相中将)、参り給ふ。(略)人知れず思ひ扱わるる人の御事、まづ思ひ出でられて、この御方の塵ともなさまほしくて、この御手習ひを見るまに、

(参)たましひの通ふあたりにあらずとも結びやせましが
ひのつま

と、書きつけたれば、「人の、かたりし事を、筆のすぎびに」と、紛らはし給ひて、(略)(注・宰相中将の)恨むる様も、人よりはをかしきをや、よそへられ給ひけん。「妹の姫君も、かやうにや」と、思ひやられて、(略)「略」げに、そも、絆などの、あながちなるがあらましかば、少しはかけどめられんかし。(略)「(中略)」

二、三日ありて、この中将のもとに、「うちつけなるやうに、思え侍れど、かの聞えし竹取(の翁、なほ、語らひ)給ひてんや。野べの小萩も、さていかが。たのみ聞えてなん。このさかしらせさせ給へ」とて、中に、

(参)一方に思ひ乱るる野のよしを風の便りにほめかしきやとある返事に、やがて、中将の、「竹取に、ほめめかし侍りしかど、いと有難く。げにこそ、扇も散らし侍りしか。

(参)吹きまよふ風のけしきも知らぬかな萩の下なる蔭の小草
は
と、思ひたる気色も、口惜しう見え侍りし。(略)「などあるを
(三三三六頁)

女二宮への罪障意識、執着を示す文脈を急に折り曲げ、傍線部①のように「又、なほ、『忍ぶ振摺は』と、源氏宮思慕に記述が移される。『忍ぶ振摺』は、『古今集』恋四、河原左大臣「みちのくのしのぶもちずりたれゆゑにみだれむと思ふ我ならなく」を引くものであるが、『狭衣物語』では一貫して源氏宮思慕を示すものとして用いられている。そして詠まれる「あくがるる……」の歌の手習いに、たまたま訪れた宰相中将が「たましいの……」の歌を書きつけ妹君をとりもつ。狭衣の手習いの内容は「身から離れさまよう私の魂も、もし恋しい源氏宮のところで魂結びをしてくれるなら、きっと我が身に帰り、本心にたち戻るでしょう」というものである。対する宰相中将の歌は「お心を寄せる方ではなくとも、あなたの魂を着物の下前の襟に結びとめることを致しましょうか」とある。源氏宮思慕はすでに出家という形でしか、

解決のつけようがなく、切り開きようのないものであった。また、その果せぬ思いを現実的側面において慰めるべき女君もすでにいない。そうした源氏宮思慕の中で、なお歌を詠む狭衣に提示された宰妹は「心を寄せる女君ではなくとも、なんとかその魂を結びとめる女君」としてである。さらに「したがひの棲³」ということばから「見えないところで思いを寄せ、人に知られない女君」として示されたことにもなる。この宰妹は、一面において源氏宮思慕を引きうける女君、また、人に知られぬよう隠れて思われる女君として置かれたと言えよう。そして狭衣は、傍線部②、③のよう、宰相中将の「おかしき」様になぞらえて宰妹を思い「げに……」と、うけとるのである。

二、三日して、狭衣は宰相中将に催促の文を送り、宰妹への積極的な姿勢を見せる。それに対する宰相中将の返し、傍線部④「吹きまよふ……」の歌に注目したい。宰妹が「蔭の小草」と表現されていることが注目される。

④「なほ、なにか、物げなきさまにしもありけんこそ、口惜しけれ。など今少し、人漏り聞かんにしも、ものものしきわたりになかりけん。蔭の小草にしも、生ひ初めけんよ」など、数ならず思し出づるも、いとど、昔の秋、恋しくなりぬ。

(二八五頁)

これは、一品宮邸で飛鳥井姫君を初めて見た時の感慨であり、母飛鳥井が「蔭の小草」と言われている。飛鳥井は「底の水屑」「道芝の露」などとも言われ、それらははかなく寄る辺のない女君としての性質を象徴する。この「蔭の小草」も「人目につかぬ

女君」としての性質を表わしているものかと思われる。「蔭の小草」はこの他二度、巻一に使われている。たとえば、

⑤数ならぬ人は、好々しくあるまじからん事好まで、さりぬべからん蔭の小草の、つゆより外は知る人なからんこそよからめ。

(六二頁)

である。「あるまじき事」として閉ざした源氏宮思慕の慰めを求める気持ちと、引用のような「蔭の小草」といわれる「知る人のない女君」を求める気持ちが相俟って飛鳥井との人知れぬ恋が導かれる。このように「蔭の小草」は飛鳥井との関係が深く、「人に知られない女君」「人目につかない女君」としての性質を付与していると思う。そして、引用⑥では、「蔭の小草」ということばは、宰妹の世なれない親がかりの娘という立場を示す一方、狭衣を慰め人知れぬ愛を受けるであろう、飛鳥井的女君としてのイメージを宰妹に漂わせるのである。

「たましひの……」の歌により兄宰相中将から紹介された宰妹が、一面において源氏宮思慕を引きうける女君であり、また「人に見えない所で思いを寄せられる隠し妻」としての女君であることと合わせ、飛鳥井的女君につらなっていく「蔭の小草」ということばが使われていることは、紹介時の宰妹が、飛鳥井的要素を色濃く持っていることを示すのではないだろうか。

これまでのことをまとめると、男女の愛として目覚めながらも、源氏宮との愛の実現を自ら閉ざしてしまふ狭衣の、行き場のない思いを引き受け、陰に慰めた飛鳥井はいない。斎院卜定という事態の中で、源氏宮思慕は切り開きようもなく滞る。それが巻二ま

でに行きついた源氏官思慕である。そのように滞った源氏官思慕を巻三後半になって、改めて文脈を折り曲げて持ち込み、その後、かの飛鳥井の要素を付されて幸妹が物語の中に持ち込まれたということになる。ではその意味するところは何かを考えたいと思うが、もうひとつ、狭衣が宰相中将邸を訪れる部分について考察しておきたい。

⑥「久しう見たてまつらざりつるけにや、様殊なる御匂ひにこそならせ給ひにけれ」と、とみに花もうち置かれず、つくづくとまばられて、涙のみこぼれぬべきを、

「人々、あやしうや見む」と、思ふに、強ひて佯しければ、紛らはしに、ありつる女御殿の御返し、御硯のうへにうち置かれたるを、取りて見給へど、いとど、かく近きほどの心のうちは、なほ更に紛れがたし。文字様など、わざと上手めかしうはなけれど、墨つき、筆のながれも、あやしうなべてならずなまめかしげにて書き流し給へり。⑦「入道の宮、飽くまでらうたげに美しき筋はすぐれ給へるものを」と、まづぞ、思ひ出でられ給ふ。

(中略)

(笈)「はかなしや夢のわたりの浮橋を頼む心の絶えもはてぬよ」

浮木にあはむよりも難き事どもかな」と、忍びて聞こえ給へど、悩ましきさまにもてなさせ給ひて、寄りふさせ給ひぬれば、はしたなくて立ち出で給へるに (三五六〜八頁)

竹生島詣にも失敗し、年が明けた春、齋院を訪れる場面であ

る。傍線部①のような押え難い源氏宮への思いと、②のような女二宮への思いが混在する中で、「はかなしや……」の歌に見るように、源氏宮との現実的發展への希望はまことに心細い。また「浮木にあはむよりも難きこと」は、一眼の亀が浮木に逢うことで、極めて困難なことを示し、ここでは絶望的に捉えられた源氏官思慕が示されたと言える。

④同じ比はひの十日宵に、一品の宮に、例の物すさまじくて眺め臥し給へるに、日項語らひ給ふ事ある人の、参りあひて、「今宵なんど、さりぬべき」と聞こゆれば、「さらば、いかがはせん。いと、かう物むつかしき心も慰みやする」と、そなたさまへ、やらせ給ひても、(略)「(略)なぞや、かくよしなし歩きも数積もれば、いとあるまじき事ぞかし」と、思し出づれば、物すさまじうなりて、ひき返す心地し給へば、しばしおしとどめさせ給へるに、築地所々くづれて、花の梢どもおもしろく見入らるる所あり。道季召して、「いかなる人の住みかぞ」と問ひ給へば、「故式部卿宮に候ふ。宰相中将もここになんおはする」と申せば、今少し御心とまりて、近うやりよせて見給へば、門はさしてけり。(略)近き透垣のつらによりて、聞き給へば、琵琶はこの御簾のもとにて弾くなりけり。⑤「争の琴は奥の方にぞ聞こゆる。「これや姫君ならん」と、耳とどめ給へるに、入道の宮の御琴を類なきものに思ひ聞こゆるに、「これは今少し愛敬づき、おもしろきことは勝れてや」とまで聞こゆるに、いと御心とまり給ひぬれど、心とけて弾き給はでやみぬるは、飽かず中々なるに、よ

ろづいとゆかしうなりぬれど、少し物のけしき見ゆべきやうもなければ、帰り出で給ふに

(三六一—二頁)

①中將の君、ありし室の八島の後には、みやの、こよなく伏目になり給へるを、つらう心憂く、「いかにせまし」と、嘆きの数添ひ給へり。我心も慰め佐び給て、「猶おのづからの慰めもや」と、しのび歩きに心入れ給へれど、ほのかなりし御腕の手当りに似る物なきにや、姨捨山ぞ、わりなかりける。その際にこそあらねども、宣耀殿のをかしき様、人には殊におはするさへ、東宮、つと纏はし聞こえ給へれば、いと難き事なる慰めに、春宮へ参り給へれば(略)(注・春宮が)宣耀殿の御方へ渡らせ給ひぬれば、「今宵は、甲斐なかるべきなめり」と、すさまじうて、まかで給ふ。

たそがれ時の程に、二條大宮が程に遭ひたる女車、牛の牽き替へなどして、「遠き程よりか」と見ゆるに、側の物見より、円頭のふと見ゆるは、この御車を見るなるべし。

(六三—五頁)

②は一品宮との冷えきつた関係を点描し、傍線部①のように、源氏宮に似ているという大納言姫君に、つてをもつ人の勧めのまに、「慰め」の忍び歩きに出かけ、偶然宰相中將邸に心がとまり、楽器の音に心魅かれるところである。③は、巻一、春宮訪問から飛鳥井物語発端に連続する箇所である。狭衣は源氏宮に思いをうちあけるが、不意に恋情をうち明けられた源氏宮は、以後狭衣との間に距離を置く。それをわびしく思い、心を慰めかねる狭衣は、「猶おのづからの慰めもや」と、「慰め」を求めて忍び歩き

をする。どういった経路からか、宣耀殿女御と通じ、その日も宣耀殿を訪れようと参内するが、生憎春宮が宣耀殿を訪れたので、やる方なく退出する。その帰り道、僧に拘引される飛鳥井と出会う。

引用④、⑤は細かな違いはあるものの、本来の目的をはずれて、行き場のない思いを抱えたまま、別の「慰め」の女君の存在と偶然触れ合うという、大筋の共通点を持っていると思われる。ここにおいても、その接触のし方に、宰妹は飛鳥井の要素を含んでいると言えるのではないだろうか。つまり、飛鳥井的性質を付された宰妹は、本格的に二人の物語が語り出される糸口である、宰相中將邸訪問という状況においても、飛鳥井との出会いの状況を引きずっていると言えるのではないか。

ここで、源氏宮思慕を中心に展開していた巻一、二の物語のあり方を振り返ってみたいと思う。そのあり方は、思慕の質によると考えられる。実質従兄妹の源氏宮への思慕を、兄妹として育ったことを一応の理由に「あるまじき事」と心理的に禁忌化する。この心理的禁忌化により、狭衣はやるせない思いを抱く。また禁忌化は源氏宮本人との物語を停滞させる。そこで「慰め」となる女性を求め、新たな女君との愛の物語が呼びこまれる。しかし、禁忌化があくまで、狭衣の心理的なものであることにより、実現の可能性、また狭衣自身のそれへの期待は保たれているわけで、源氏宮への思いが、新たな女君との愛に転化されることはない。新たな女君への思いは「慰め」という側面を引きづりながら、源氏宮への思いと表裏してなされる。しかも、さらに特異なことは、

(三)

「いろいろな重ねては着じ人知れず思ひそめてし夜半の狭衣」(五二頁)の歌に示されるように、源氏宮への思いを唯一のものとして、絶対化しようとさせる。このように、源氏宮への思いを心理的に禁忌化してしまうことで、「慰め」の女君との物語が持ちこまれる。しかも禁忌化があくまでも心理的なものであり、かつ源氏宮への思いを唯一のものとしようとする結果、「慰め」の女君との物語は閉ざされ、狭衣の思いは源氏宮に帰していくのである。このような方法により、心理的禁忌化——客観的な禁忌性をもち得ないこと——の結果、恋の実現——単なる結婚——という結着を回避しつつ、その為に独自の展開が滞る、源氏宮思慕の物語を中心に据えての物語展開が可能になっているのである。

宰妹との物語に戻る。状況的に違いは生じているものの、斎院源氏宮との進展せず滞る物語の片側に「慰め」の女君との物語を展開する。「慰め」という源氏宮思慕の裏側にある女君の物語を展開することで、その表にあって滞る、源氏宮思慕による物語を浮かび上がらせ、維持する。つまり、骨格において巻一——飛鳥井を絡ませる源氏宮思慕の物語——のあり方にきわめて類似する方法が、宰妹の物語にもう一度かぶせられようとする方向性を読みとることができるのではないだろうか。むしろ、飛鳥井の性質のもとに宰妹は持ち込まれ、棚上げになっていた源氏宮思慕の物語が回復されようとする方向性をここに読みとることができると思う。そのような回復のあり方を一度認定しておきたい。

しかし、もう一度引用④の後半、傍線部②の部分に注目しなければならぬと思う。狭衣を通して確認される宰妹自身は、姿ではなく箏の琴の音においてである。しかも女二宮の琴の音との比較対照から宰妹への興味が持たれることは注意される。

④そのわたりを行み給ふ程に、箏の琴のいたうゆるびたるを盤渉調に調べて、わざとならず、忍びやかなる、絶え絶え聞こゆ。(一二六頁)

女二宮と逢ってしまふ夜も箏の琴の音があり、それに誘われ、宮の美しい姿を見て逢瀬へとつながっていた。問題は、飛鳥井的の女君として、飛鳥井物語的発端を担わされ、源氏宮思慕の物語を回復していこうとする方向性を持ったと思われた宰妹の物語であるのに、初めて狭衣の感覚で捉えられる宰妹が、箏の音を通じて女二宮との比較の上に興味をもたれ、女二宮を浮かび上がらせてしまうことである。これは、源氏宮思慕の物語に、どうしてもなく女二宮思慕が喰いこんでしまったことを示すものではないだろうか。その思慕の質から停滞を余儀なくされ、やり場を失った思いを受けて新たな物語が展開し、それによってまた源氏宮思慕を浮かび上がらせる巻一のあり方をもって、この切り開きような源氏宮思慕の物語を回復しようとする。が、その方向性は、これまで積み重ねてきた女二宮との関係、思慕、の侵蝕により、その限界を示されたと言えるのではないだろうか。すでに源氏宮思慕が、狭衣の行為を、つまり「恋の物語」を紡ぎ出していくと

いう、源氏宮思慕を中心として展開する物語の可能性が、これまでの物語を背負うことで、その限界を示されたのではないかと思う。

また、源氏宮齋院卜定により、それまでは心理的な禁忌化にすぎなかった「あるまじき事」が、現実の禁忌となり、現実的發展の可能性が著しく低下し、一品宮との結婚により、「いろいろな重ねては着じ」も崩れる。したがって、実現の可能性と、唯一絶対化により、他の恋を源氏宮思慕に回帰させる回路はすでに絶たれている。そのことから、この方向性の限界はあったと言えよう。しかし、ここにおいて、それが女二宮という、巻三の物語の中で機能的に源氏宮の肩替わりをしつつ重みを増していった女君により、その限界が示されたということは、物語の進行とともに、源氏宮思慕の物語の中心性が喪失し、回復し難いものとなったことを露出させているのではないだろうか。この後、狭衣の即位という展開が呼びこまれ、冒頭源氏宮思慕に開かれた「恋の物語」が終盤、その展開を失う。そして、様々な女君への思いのみがくり返されるという状況に陥る。幸妹は、飛鳥井、女二宮、源氏宮（形代として）、それぞれの面影を背負いながら、結局、現実面での慰めの立場におさまリ、その分矮小化し、失われた女君達への思いのみを呼びだしていく。それでもなお、最終、女二宮思慕をもって物語が閉じられる。これらのことは、有機的に絡まって、物語が新たな状況の中に流れこんでしまっていることを示すものであろう。即位その他の問題と連絡するであろう物語の新たな状況については、稿を改めて詳しく考察しなければならないが、今

は源氏宮思慕の物語と幸妹、という問題に戻り考えをまとめていきたいと思う。

このように、源氏宮思慕中心の物語を回復しようとする方向と、それを閉ざす方向が混在する中で、なお執拗に幸妹には飛鳥井の影がちらつく。宰相中将郎を覗き見た翌朝、狭衣は訪れてきた宰相中将に強く幸妹を望む。物の数でない幸妹にとって、狭衣の心浅さは不安だと言う宰相中将に対し、物語地の文において、「宮の御ため、をろかなるを、例に言ひ出づるぞ、あぢきなや。『道芝の露』ぞ、袖にかけ給はぬ暇なく、忘れ給はさんなるものを」（三六八頁）と、狭衣の誠実さが釈明される。「道芝の露」は飛鳥井の行方を問う狭衣の歌（一九九頁）より、飛鳥井を指すことばのひとつとなった。飛鳥井への思いの深さを幸妹思慕の保証とする文脈が形成されるのである。血筋こそ違うものの、「数ならぬ身」——現実面において心細い身の上——の女君として、幸妹は飛鳥井性を付与されていると思う。その限界を示しつつ、飛鳥井的女君として幸妹を位置づけることで、源氏宮思慕中心の物語を回復しようと、物語は喘いでいるのではないだろうか。しかし、物語の流れの中でその方向性は閉ざされ、幸妹は容姿、容貌の極似する、源氏宮の「形代」として据え直される。

(四)

停滞している源氏宮思慕を幸妹自身の中に回復し、源氏宮思慕の物語を継承して語ろうとするかのように、物語はこれ以後しば

らく袈衣と幸妹に集中する。「形代」として置かれた時から、幸妹は源氏宮の形態的側面、さらに言えば肉体的側面を担ったことになる。そうした幸妹は袈衣との現実的に密着した時間を過ごした後、肉体的な関わりを回避されたとも言える源氏宮と、少しずつ、ずれを生じてくる。「かばかりを慰めてやみねと、神仏も掟て給へりけるにこそは」と、片つ方の胸は、なほうち騒げば」(四一五頁)と、似ているということがかえって「片つ方」源氏宮への思いを呼び起こし、肉体的側面を担う形代では収まりきらないものを、意識する。しかし、源氏宮への激しい思いを呼びさますこともなく、「思ひし事は叶はぬにはあらずかし。この神山の惑ひはまめやかにあるべかりし事かは」と、諦めるような思いの中で、現実的側面を担う女君として幸妹は置かれる。導入時に規定された「慰め」の女君という側面のみを担い、源氏宮思慕の物語を回復することはないまま、巻一の飛鳥井の生存していた場合の未来図として置かれたと言えるのかもしれない。

以後、幸妹は源氏宮思慕を全的に引き受け、物語の展開を担うことができず、現実面での充足と、源氏宮思慕を呼び戻す女君として点描されるばかりになっていく。しかも、源氏宮思慕も思慕のまま佇み、点描されるにとどまる。「形代」としての幸妹の導入は、源氏宮思慕の物語を継承することはできない。そればかりか、藤壺として入内し、形の上で、本来源氏宮が着くはずの位置に据えられることで、源氏宮思慕自身を呼び戻しつつ、逆にそれによる物語を閉ざしてしまっているのではないだろうか。

かつて粉河詣以前に、飛鳥井の、また女二宮の物語を導き、さ

らに袈衣の現実離脱願望を導いて物語の展開を担った源氏宮思慕の物語は、幸妹思慕によっても、源氏宮思慕自身によっても、回復しえないものとなっていると言えるのではないか。「恋の物語」としての「袈衣物語」の一支柱である源氏宮思慕の物語の崩壊する姿が、「形代」幸妹を通して明らかになっているのではないだろうか。

幸妹は、単に源氏宮思慕を終息させる形代としてではなく、源氏宮思慕の物語を回復する方向性を内在していることを、飛鳥井の女君という側面から明らかにし、しかもそれが、女二宮の存在つまりそれまでの物語を背負うことで、源氏宮思慕の物語は回復のし難いものとなっていくことを、それらを明らかにすることを中心に論じてきた。さらに「形代」としての幸妹の存在は、源氏宮思慕の物語を継承し、背負うことができず、逆に閉ざしているということについて触れ、「形代」幸妹を通して源氏宮思慕の物語の崩壊、すなわち思慕による物語が崩れ去る姿の一端としての終盤部分を考えてみた。

以上、本稿は幸妹をめぐる「恋の物語」の大きな柱であった源氏宮思慕の物語が、とり返されようとしつつも崩れていく姿を追ってきた。「袈衣物語」の後半部は、「恋」の徒であろうとする袈衣を尻目に、「恋の物語」がどうしようもなく崩れ去っていくことを、物語として展開しないことを、前半部との対照の中で、ことさらあらわしているように思う。そうした前半部から後半部への動きは、現実を離脱しうるのは袈衣が、現実にくくりつけ

られていくライン——天稚御子降臨から賀茂神の神託に到るライン——と大旨一致する。「恋の物語」を背負えない狭衣と、現実にくくりつけられる狭衣とはつながっているであらう。そして、現実の中にあえぐ狭衣は、おそらく別のものを背負っているのであらう。それらのことを物語が明かにすることによって、現実否定にもつながる（しかし否定しきれない）作品主題を提示するのではないか。そうした見通しの中で、本稿は「恋の物語」を紡ぐうとして紡ぎえない姿を、方法としての崩壊という立場において明らかにしたかったのである。

巻三の、女二宮思慕を浮上させての物語も、巻二との対比の中で、以上のようなことを明かすものと捉えている。それについては稿を改め詳しく論じたい。また、狭衣があくまで「恋」の徒であらうとするのは何故か。「恋の物語」ではない何か、それは何か。さらにそれを背負うことで現実にくくりつけられていくとは、どういうことか。問題は山積するが、稿を改め、少しづつ解決していきたいと思う。

注(1) 森下純昭氏「狭衣物語の人物関係——『らうたし・らうたげ』をめぐって」(『岐阜大学国語国文学』S 53・3)、深沢徹氏「往還の構図もしくは『狭衣物語』の論理構造——陰画としての『無名草子』論」(『文芸と批評』S 54・12)の御指摘に拠る解釈をとる。

(2) 幸妹は「形代」ということばの中に封じられ、詳しく論及されていないように思う。その中で、久下晴康氏は『狭衣物語』の内部構造は、源氏宮物語がおよそ三つの段階、すなわち源氏宮の斎院卜定、狭衣と宮の姫君(幸妹)との

結婚、狭衣の即位によって縮小し終息していく」と、『狭衣物語』の構造(『平安後期物語の研究』S 59・12所収)において、幸妹を源氏物語を終息させるものと指摘されている。また、同氏同論文は「形代を見るものが本体の源氏宮への恋慕を蘇らすよすがとなつてしまつてゐる」と言われる。野村倫子氏も「本体を忍ぶ方法」とされる。(『狭衣物語』の形見・ゆかり考)『平安文学研究』S 60・6)最終的な幸妹の位置が阿氏の言われる所に落ちつくと考えすることに異論はないが、幸妹導入の意味は「形代」であるゆえに、もう少し源氏宮物語と関わるものとして積極的に見ていきたい。

(3) 「したがりひの褌」は着物の前を合わせたとき下になる部分で、褌に妻が掛けられていると考え、「人に見えない隠し妻」としての意味を読みとる。体系本の解釈に従う。

(4) 「佛難得値。如優曇羅華。又如一眼之亀。值浮木孔。(仏に値いたてまつることを得ること難きこと、優曇波羅の華の如く、又、一眼の亀の、浮木の孔に値うが如ければなり。)(法華経、妙莊嚴王品二十七。岩波文庫より引用) 拙稿「飛鳥井物語の位相——源氏宮思慕中心の物語との関わりにおいて」(『中古文学論攷』七号、S 61・10)で、前半の物語のあり方について論じているので、御参照いただければ幸いである。

【付記】 本稿は、早稲田大学国文学会(昭和六十一年十一月二十九日)における口頭発表を基に、加筆訂正したものです。御意見を賜りました諸先生方に心より御礼申し上げます。